熊本地震 5年

記憶 風化させたくない

付箋イベント企画 熊本大学院生

熊本地震が発生した5年前、熊本の大学に進学後、すぐに被災し、見知らぬ土地、での避難生活を強いられた他県出身の学生は少なくない。沖縄県出身で熊本大大学院2年の高良幸作さん(25)もその一人だ。高良さんは地震発生と同じ日の4月14日と16日、若者たちの思いを集めるイベントを企画した。「風化させてはいけない」という願いからだ。

「復興に向けみんなでがんばろう」「僕ら若者が地震の記憶を継承していく」

本震から5年を迎えた16日、熊本市東区の東海大熊本キャンパスに縦170センチ、横120センチの1枚のボードが置かれていた。ボードに描かれた「絆」と題した木の枝には、学生ら若者たちが地震への思いをつづったピンクの付箋が100枚以上貼られていた。「一人一人がつながった」。ボードの横に高良さんの姿があった。

復興へ向けた行動を後押し

2016年4月、崇城大(熊本市西区)に入学した高良さん。同月14日夜、大学近くのアパート1階の部屋でくつろいでいる時に、大きな揺れに襲われた。「沖縄は地震がほとんど無いので何がなんだか分からなかった」。ぼうぜんとした中、隣人が駆け付けたことで、事の重大さに気付いた。近くの小学校に避難後、アパートに戻り不安な夜を過ごしたという。

本震があった16日は県内の大学に通う沖縄出身の4人でタクシーに乗り合わせ、福岡から沖縄への最終便に駆け込んだ。「ひと安心したが入学したばかりで、すごくショックだった」。そんな状況の中、避難していた沖縄で約2週間、熊本の大学に通う学生と一緒に募金活動をした。

5年がたち「熊本地震で何か発信したい、自分にできることは何か」を問い、企画したのが「絆の木」プロジェクトだった。「復興に向けて行動しようと思っていても踏み出せない若者たちの、背中を押すきっかけにしたい」

思いつづった「絆の木」満開

「未来の熊本へのエールを付箋に書いて」。一段ボールで手作りした看板を持ち14日に、熊本市中央区の繁華街に立ち、協力を呼び掛けた。実消りする若者たちも多く、その関心の薄さに「沖縄の基地問題にも似たような感じがある」と高良さんは言う。一方で、立ち止まって被災時の思いなどを書き込む人たちもいた。

「プロジェクトは、自分中心的な考えからのものかもしれないが、地震の記憶を風化させたくないという思いがつながったと思う。協力してくれた人たちに感謝したい」。プロジェクト2日目の16日、ようやく“満開”となった「絆の木」を見つめ、目を細めた。

(藤山裕作)

▶熊本地震から5年。若者たちの思いを集めたプロジェクトに取り組んだ熊本大大学院の高良幸作さん=熊本市東区

▶熊本地震への思いをつづった付箋の“花”で埋まった「絆の木」